

当科では過去5年間に成人腸重積症4例を経験した。上行結腸癌・回盲部癌によるものが各1例ずつ、術後イレウスの診断で開腹し腸重積と判明したものが2例である。重積部位は4例とも回腸→上行結腸型であるが、術後イレウスとして発症したうちの1例は開腹下での整復後2カ月目に再度回腸→回腸型の腸重積を生じた。

腸重積症は理学所見に乏しいため術前診断は画像所見によるところが大きい。CTによる腸管内腫瘍像は本症に特徴的な所見であり、3症例で術前診断が可能であった。CT所見を中心に若干の文献的考察を加えて報告する。

## 27) 虫垂粘液腫による腸重積の1例

林 光弘・梅原 有弘 (県立六日町病院)  
蛭川 浩史・広田 正樹 (外科)

虫垂に腫瘍が発生することはその良悪性にかかわらず稀とされているが、今回我々はその中でも比較的少ないとされている虫垂粘液腫が重積症を併発した症例を経験したので報告する。症例は78歳男性、平成7年8月6日より食思不振、および腹痛出現、8月11日近医受診、右下腹部に腫瘤を指摘され当科紹介となった。初診時の腹部理学所見では右下腹部に軽度の圧痛と腫瘤を触知するも筋性防御は認めなかった。また、検血生化学所見ではCRP1.7 mg/dl と軽度の上昇を認めたが、他に異常値はなかった。しかし腹部超音波検査にて右下腹部の腫瘤に一致してリング状陰影を認めたため腸重積による腸閉塞を疑い、同日緊急手術となった。開腹所見では虫垂根部を先進部とした腸重積であったが用手的整復は困難であり、また悪性腫瘍による腸重積も否定しえなかったため右半結腸切除術を施行した。切除標本で虫垂粘液腫であると診断された。術後経過は良好で手術後第14病日目の8月25日に退院した。今回は術前の超音波検査が緊急手術決定に有用であった症例と考えられる。

## 28) 女性虫垂炎と卵管炎との鑑別

高野 征雄・武藤 一朗 (秋田赤十字病院)  
大谷 哲也・長谷川 潤 (外科)

【目的】当科で入院治療された女性の急性虫垂炎例を検討し、保存治療の際の卵管炎との鑑別法を求めた。

【対象】最近6年間に当科で入院治療された女性の急性虫垂炎106例(手術56例、保存治療50例)を検討した。

【成績】手術例の術後診断は虫垂炎46例、卵管炎7例、

大腸憩室炎2例、腸炎1例であった。この卵管炎例の術前病態を検討すると、1)悪心、嘔吐などの消化器症状が少ない、2)腸雑音の聴取可能、3)デファンスが少ない、4)肛門指診で子宮の圧痛を認めた。そこで保存治療された50例の内、腸炎、感冒症候群などを除外した39例を検討したところ、虫垂炎と診断されたのはわずか8例で31例は卵管炎であった。手術された虫垂炎例、保存治療された虫垂炎例、卵管炎例の三者間で術前の白血球数、入院日数に差はなかった。

【結語】保存治療された女性虫垂炎例の80%は卵管炎であったと考えられた。

## 29) 急性虫垂炎手術例の検討

川口 英弘・山崎 俊幸 (巻町国民健康保険  
病院外科)

【目的・対象】1987年3月以降当科で経験した急性虫垂炎手術例162例を対象とし、術前の状態から急性虫垂炎の重症度を予測できるかどうかを検討した。

【方法】虫垂炎の程度は①catarrhalis ②phlegmonosa ③gangrenosa ④perforationに分け、統計学的検討は $\chi^2$ test、対応のないWilcoxon検定、Kruskal-Wallis検定を用いて行った。【結果】虫垂炎の重症度と関係のある因子は、発症から手術までの時間(p=0.0003)、白血球数(p=0.0005)、年齢(p=0.0012)、筋性防御の有無(p=0.0405)で、初発腹痛部位では臍周囲部痛(p=0.0499)で重症例が多かった。また男女比(p=0.0757)や下痢の有無(p=0.0961)でも傾向を示したが、Blumberg徴候の有無(p=0.3854)、直腸・腋窩の体温差(p=0.1117)や腹部超音波検査上所見のあるなし(p=0.2204)では差は認めなかった。【結論】急性虫垂炎の重症度を予測する因子としては、発症から手術までの時間、白血球数、年齢、筋性防御の有無、初発腹痛部位(臍周囲部痛)が重要である。

## 30) 急性虫垂炎における保存的治療の検討

川口 英弘・山崎 俊幸 (巻町国民健康保険  
病院外科)

【目的・対象】1989年4月以降当科では、白血球数が13,000/mm<sup>3</sup>以下で筋性防御を伴わない急性虫垂炎症例に対し保存的治療を選択してきた。現在までに保存的治療を選択した79例を対象とし、保存的治療の妥当性につき検討した。【方法】以下の点につき検討した。①保

存療法から手術療法に変更した症例, ② 再発例と再発率, ③ 投与された抗生物質別の治療効果, ④ 入院期間ならびに入院費からみた手術施行例との比較. 【結果】① 79例中12例が手術療法に移行したが, 小児の穿孔例を経験した. ② 67例中再発症例は9例(13.4%)で全て男性であった(男性:9/42例, 女性:0/25,  $p=0.0342$ ). 手術例は6例であったが, 12歳と77歳の2例が穿孔症例であった. ③ 投与された抗生物質は, ホスホマイシン±ミノマイシン, セフェム系が多かったが治療効果に差はなかった. ④ 入院期間は $6.58 \pm 2.35$ 日, 入院費は $141,402 \pm 59,269$ 円で, 手術施行例の $12.8 \pm 11.3$ 日,  $361,269 \pm 153,286$ 円との間に差を認めた( $p < 0.0001$ ). 【結論】保存的治療後の再発率は13%程度であり, 入院期間や入院費の面からみても保存的治療は妥当と考えられたが, 50歳以上や20歳未満の症例では穿孔し重篤化することがあり注意を要する.

31) Mesh plug hernioplasty の検討

長倉 成憲・石崎 悦郎 (済生会新潟第二)  
相場 哲朗・川口 正樹 (病院外科)

長年鼠径ヘルニアの修復術は, Bassini 法を中心に行われてきた. しかしこれらの術式では, 縫合部にかかる緊張は避けられず, 術後の疼痛, 創部のつっぱり感を来す事になる. また文献によると, この緊張で縫合部の壊死が起り再発につながると考えられている.

当院では, 1995年より polypropylene mesh (Marlex mesh) を用いた tension-free hernioplasty (以下 Mesh 法) を施行している. 1993年以降成人鼠径ヘルニア手術を施行した患者にアンケート調査を行い, Bassini 法と Mesh 法について比較検討したので報告する. 入院日数, 術後の疼痛ならびにつっぱり感を自覚した日数ではいずれも Mesh 法の方が有意に短かった. 創感染, Mesh に対する拒絶反応, 再発を認めた例は現在までのところ無く, 本術式は成人鼠径ヘルニアに対し有用と考えられる.

32) 再発成人鼠径大腿ヘルニアの検討

早見 守仁・関矢 忠愛  
斉藤 六温・吉田 正弘 (刈羽郡総合病院)  
杉本不二雄 (外科)

近年, 成人鼠径, 大腿ヘルニアに対し, より再発の少ない術式について様々な検討がなされている. 当科でも

幾つかの術式を採用し, 再発の減少につとめてきたが, なおその消滅には至っていない. そこで, 今回, 自験, 再発鼠径大腿ヘルニア, につき再発予防の面から検討した. 当科で平成元年以降, 手術が行われた再発ヘルニアは外鼠径ヘルニア型9例, 内鼠径ヘルニア限局型5例, 内鼠径ヘルニアび漫型2例, 大腿ヘルニア型4例の計20例であった. Mizrachy 法後の再発は外鼠径型2例, 大腿型1例で内鼠径型は認めなかった. 再発までの期間は, 3年以内と5年以上とに区別され, その成因が異なることが示唆された. 外鼠径型再発は晩期に多く見られ, 大腿型再発は早期に多い傾向が見られた.

33) 当科で経験した Aggressive angiomyxoma の1例

清水 孝王・三科 武  
鈴木 聡・飯沼 泰史 (鶴岡市立荘内病院)  
斉藤 博・鈴木 伸男 (外科)

我々は, 骨盤内に発生した稀な腫瘍 Aggressive angiomyxoma (AAM) の1例を経験したので, 報告する. 症例は45歳の女性. 1994年1月頃より左外陰部の腫脹を認め, 近医にてバルトリン腺嚢腫の診断で開窓術を受けた. しかし腫脹は改善せず, 当院婦人科で精査の結果, 後腹膜腫瘍と診断され当科紹介となった. 1994年7月14日腫瘍摘出術を施行. 腫瘍はゼラチン様で骨盤腔左側に充満していた. 病理診断にて AAM と診断され follow-up となった. その後1995年2月のCTで骨盤腔内に再発がみられ, 同年7月31日経仙骨の腫瘍摘出術を施行した. AAM は骨盤内や会陰部に発生し, 血管増生・局所浸潤・再発性を特徴とする粘液腫様の極めて稀な腫瘍である.

34) 著明な低ナトリウム血症を呈した2例

佐藤 友威・草間 昭夫  
角南 栄二・岡村 直孝  
若桑 隆二・田島 健三 (長岡赤十字病院)  
和田 寛治 (外科)  
広田 雅行 (同 小児外科)

消化器癌の経過中に著明な血清電解質異常を来した2症例を経験したので報告する. 1例は直腸癌にて低位前方切除を施行, 術後縫合不全にて, ドレナージ手術を施行したところ, 著明な低 Na 血症と精神障害を呈した例である. 他の一例は幽門狭窄を伴った胃癌症例で, 入院精査中に著明な低 Na 血症を呈した例である. いず